



2017年1月25日放送

## 印象に残る症例②

長崎大学 産婦人科学教室 助教 **増崎 雅子**

今日は漢方の「気血水」の概念のうち「血」の異常に関する症例を紹介させていただきます。前回と同様に私が漢方を使い始めた頃に強く印象に残った患者さんと最近の患者さんを合わせて紹介することにします。

### 症例 1

最初の患者さんは、70歳代の女性の方です。私が長崎大学病院産婦人科で「女性の心と体の健康外来」という女性専用の外来を立ち上げたばかりの頃に出会った患者さんです。主訴は「膣、外陰部の痛み」です。患者さんの訴えでは2年ほど前から膣の入り口付近が痛みだし、今は奥の方まで痛む。痛みには波があり、ひどく痛んだり軽快したりする。痛い時は下着も着けられない。椅子にも座れない。産婦人科はいくつもかかったけれど、どこに行っても、炎症があるとは言われるが、それ以外の婦人科的疾患はないと言われる。検査もいろいろ受けたが異常を指摘されたことはない。内用、外用の鎮痛剤、その他の塗り薬、女性ホルモン、神経性疼痛緩和薬などいろいろ治療を受けたが治らない。どこの産婦人科でも何もできないと言われ、これが最後と思って大学病院を受診したという方です。大学病院の新患外来で診察した先生から「漢方でなんとかなりませんか」と女性外来へ紹介されました。

身長 153cm、体重 51kg、色白の小柄な方です。合併症は高血圧および高脂血症があり、その薬剤を服用中です。目と口の乾燥症状があり、シェーグレン症候群疑いで大学病院

歯学部を通院中ですが、抗 ss-A 抗体、抗 ss-B 抗体ともに陰性で、シェーグレン症候群の確定診断には至っていません。既往歴は、50 歳の時に子宮筋腫のため子宮全摘出術を受けています。大学病院での初診時の診察所見では子宮摘出後、唯一、視診に外陰部の軽度発赤が異常所見として挙げられているのみで、婦人科的にはその他特に異常はありませんでした。患者さんによれば痛みがひどい時は真っ赤に腫れあがっているけれど、そうでない時は腫れていないということでした。

この頃、私は漢方の勉強を始めて間もない頃でしたが、大学病院の産婦人科医局の中には漢方薬を得意とする先生は一人もいませんでした。そのため漢方に関しては精神科医で同級生の川口哲先生に指導を受けていました。もともと多くの産婦人科医師が診ても治らなかったという患者さんです。ましてや私に漢方を教えてくれていた川口先生は産婦人科医でもなく、相談を受けて大変お困りになったと思いますが、とりあえず私の話を聞いて下さって「本当に赤く腫れているのなら温清飲を処方してみてもはどうですか」と教えて下さいました。

温清飲を処方して 2 週目に再来させたところ、患者さんはいくらか症状が落ち着いているようだとされます。その後も温清飲を続行したところ、初診から 6 週後に痛みのくる周期が延びて 5~6 日に 1 回になった。痛みも以前ほど強くなく我慢できる痛みになってきた、と言われました。初診から 9 週後、また強い痛みが起こるようになりました。この時、近頃脱毛が多いという訴えが患者さんからありました。この時初めて患者さんは血虚の症状が強いと気づき四物湯を処方しました。そして、平常は四物湯を服用し、腫れの強い時は四物湯に加えて温清飲を服用するようにと指示しました。

初診から 13 週後には調子が良くなり、温清飲を服用したのはこの 4 週間の間に 10 日にすぎませんでした。初診から 17 週後には症状は時々起こる程度になり、温清飲の服用はこの 4 週間の間に 3 日間だけになりました。痛みの程度もかなり軽くなりました。初診から 22 週後には時々痛む程度となり、痛んでも温清飲を飲むほどではなくなりました。この頃、鼻と口の乾燥症状がなくなり、シェーグレン症候群の疑いでかかっていた歯科への通院を中止したと言われました。

## 症例 2

二人目は一昨年の患者さんです。患者さんは 30 歳代の女性で、4 か月前から肛門と膣の間が痛むようになりました。外陰部に物が触れると痛みます。一般の産婦人科を 3 か所受診しましたが異常なしと言われました。総合病院の肛門科を受診して異常なしと診断され、同じ病院の産婦人科へ紹介されましたが、ここでも異常なしと言われました。ヘルペス、細菌感染等はすでに検査で否定されています。触れると痛むので椅子に座れません。痛みはヒリヒリ、ズキズキと表現されます。椅子に全く座れなくなり、2 か月前から仕事を休んでいます。脊椎腫瘍を疑われ大学病院の整形外科へ紹介されましたが、脊椎の器質的疾患は否定されました。その他整形外科的に異常なく、次に大学病院の神経内科へ紹介されま

したが、神経学的に異常なく、神経内科から私のいる「女性の心と体の健康外来」へ紹介されました。

患者さんは身長 159cm 体重 46kg、やせ型の女性です。体重はこの4か月の間にストレスで食欲低下して2kg減少しました。腹診では軽度の心下痞硬と臍の右に圧痛を認めます。便秘があります。尋ねると、脱毛が多く爪がよく割れると言われました。この方も先の患者さんと同様にベースに血虚があると診断して、初診時に四物湯を処方しました。初診から6週後に外陰部の痛みはかなり軽快し、初診から10週後には患者さん自身が「椅子に座れなかったのが嘘のよう」と言われて仕事にも復帰されました。

## 考察

漢方では病因を捉える理論の一つに「気血水」の異常というものがあります。その中で「血」は現代医学の血液に相当するものですが、血液よりもやや広い概念を指すといわれています。「血」の異常には足りない時の血虚と滞っている状態を指す瘀血があります。

今回取上げたお二人は、長崎大学病院の「女性の心と体の健康外来」で取り扱った患者さんです。これは女性専用外来ですが、性差に基づいて女性に対する医療を行うという主旨の外来で、当時千葉県立東金病院の天野恵子先生が日本に持ち込み提唱されたものです。一般的には「女性外来」と言われます。私はこの「女性外来」を始めるにあたって、天野先生から女性を診るならば漢方が必須と教えられ、漢方を勉強するようになりました。

最初の患者さんに投与した温清飲は『万病回春』を原典としますが、四物湯と黄蘗解毒湯の合方になっています。四物湯は原典が『和剂局方』にあり、血虚の基本方剤とされています。四物湯自体はあまり使用頻度の多くない処方ですが、実は温清飲のように合方になって方剤の中に含まれています。よく使われる十全大補湯、当帰芍薬散などがこれにあたります。高山宏世先生の『漢方常用処方解説』に「地黄と芍薬は血中の血薬で補血の正薬である。当帰、川芎は血中の気薬であり、養血して血中の気を行らしこれを流動させる。血薬と気薬の配合によって互いに補い合い、血が阻滯せず、営血が調和する」とあります。つまり血虚と血滞の両方を改善します。

女性の外陰部痛は、原因不明で治療が困難なことが多い症状です。国外でも *vulvodynia* と称されます。ここで紹介した患者さんの他にも外陰部の痛み、違和感などを主訴として女性外来を受診される患者さんがいます。話をよく聞いてみると痛み方にもいろいろな場合があり、私はズキンズキンと表現されるような拍動性の痛みは血の異常が絡んでいると考えます。最近では外陰部痛だけでなく、もう少し幅広く慢性骨盤痛にも適応があるのではないかと考えています。慢性骨盤痛の原因は骨盤静脈不全や臓器のヘルニアが原因として挙げられますが、骨盤静脈不全はまさに漢方でいうところの瘀血ではないでしょうか。

私は骨盤内の静脈が怒張している Taylor 症候群に四物湯合桂枝茯苓丸が奏効したという文献を読んで以来、四物湯単剤ではなく四物湯合桂枝茯苓丸から処方を開始するようになっています。最初はこの2剤でよく奏効しますが、途中から四物湯は飲みにくい、胃にもた

れると言われる方がいます。これは当初血虚+瘀血であったものが血虚は改善されてきたと  
考えて、四物湯は中止し、桂枝茯苓丸単剤に変更します。いずれにしても血虚ないし瘀血  
がありそうな痛みの場合は腹診などを目当てに処方します。

医学の世界ではこの 100 年ほどの間に西洋医学の急速な進歩があり、漢方は古いと思わ  
れるようになっていきます。しかし、私たちの身体が 100 年ほどの間に変化したわけではあ  
りません。漢方を使ってみると、現代医療の中にも漢方が活躍する局面がまだまだたくさ  
んあると感じることがございます。